

● 江戸時代（文化文時代）の『越後野志外集』[小田島允武著 文化12年（1815）～文政9年（1826）の間と推定*]。本書は「越後の動植物辞典」ともいべき貴重な宝典とのこと。

* 同氏は『越後野志』の筆者であり、それを完成させたのが、文化12年（1815）であり、文政9年（1826）になくなったので、その間に刊行されたとみられている（石川秀雄：新潟県郷土叢書 二 昭和52年刊行による）。

海石榴（ツハキ・ツバキ）に関する記載

「諸郡山中村落共多之二月花ヲ開山ニ生スル者五出ノ単紅花耳ナリ三島郡田頭山年友山蒲原郡国上山峯山長シ安ク繁茂シテ高サ丈餘大サ数尺ノ者アリ」と記述しているが、前記丸山の『越後名寄』の転記であるとみられる。しかしながら、丸山の指摘した、深山のツバキと蒲原のツバキの区別を引用していない。つまり、現在のユキツバキとヤブツバキの形態的な違いは、本書では混合して明確に認識していない。

明治時代以降のユキツバキの名称や形態に関連した記述は、伊藤忠雄（2000 新潟駒場会誌 第29号、新潟駒場会）により、丸山忠次郎（津川高等学校教頭）のユキツバキ命名に係わる業績として詳しく紹介している。また、関連した内容が本冊子33号でも取り上げている（石沢 2003）。

丸山忠次郎氏がユキツバキの形態について記録した最初の人である、と記述しているが、上記丸山元純の記録がそれよりも古く、さらに県内のツバキの分布状況を認識していたことになる。

なお、明治から昭和初期にかけて、新潟県におけるツバキに関する記録には、次の文献がある。

● 明治時代『新潟県博物調査会誌 第3号』（1909 明治42年）にツバキの分布が記録されている。

新潟区：南蒲原郡下田方面・弥彦方面のツバキの記録はない。

新発田区：二王子方面（No.54 ツバキ）、胎内方面（No.126 ツバキ）、津川方面（No.385 ツバキ）

長岡区：守門岳（浅草岳）方面（No.273 ツバキ）、小千谷方面（No.199 ツバキ）

高田区：菱ヶ岳方面（No.191 ツバキ）

ここでのツバキは、現在の分布調査からユキツバキにあたる。

● 大正時代『新潟県天産誌』（中村正雄編 1925 大正14年）に県内の野生種ついて次の記録がある。

「ツバキ科 Thea japonica Nois ツバキ 普通（方言ヤマツバキ）」

なお、別に「観賞園芸植物 木本ノ部にもツバキを記録している。

● 昭和時代『郷土調査資料』（東頸城郡中央部教員協議会 昭和12年）

第参章 天産物 1. 郷土の植物誌 ツバキ 春 赤「自生品ヲやまつばきトイフ」

昭和時代の初期の文献として上記の記録を紹介したが、同時代の中期・後期にはユキツバキの存在が明らかになり、多くの文献があるが、ここでは省略する。

享月 日 楽斤 屋戸

2004年(平成16年)3月22日 月曜日 42375号

<p>2004』(築地書館)で言及している。育成するという言葉「ハヤシ」の名詞形が「ハヤシ」。自然の樹林がモリであり、人工の加わった里山から平野の樹林がハヤシだった。しかし、古文書でモリとハヤシが常に厳密に区別して使われていたかという点必ずしもそうではない、と▼森林の癒やしの効果について、林野庁が新年度から本格的に説明を始めるという。例えば、森林浴が、免疫力の向上やストレスの軽減にどう働くのかを医学的に調べる。できれば、都会周辺の林や鎮守の森などでも調査してもらいたい。今では、深い森だけではなく、小さな林もまた貴重な存在とな</p>	<p>天声人語</p> <p>木が林になり森になる。木一本から、まほらに木が連なり、やがて濃く深い広がりへと至るさまが文字で分かる▼林と森の間柄について、歴史学者の上田正昭さんが、今月創刊された年鑑『森林環境2004』(築地書館)で言及している。育成するという言葉「ハヤシ」の名詞形が「ハヤシ」。自然の樹林がモリであり、人工の加わった里山から平野の樹林がハヤシだった。しかし、古文書でモリとハヤシが常に厳密に区別して使われていたかという点必ずしもそうではない、と▼森林の癒やしの効果について、林野庁が新年度から本格的に説明を始めるという。例えば、森林浴が、免疫力の向上やストレスの軽減にどう働くのかを医学的に調べる。できれば、都会周辺の林や鎮守の森などでも調査してもらいたい。今では、深い森だけではなく、小さな林もまた貴重な存在とな</p>
---	---

1892年3月1日第3種郵便物認可

っているからだ。もし、近隣の林でもその効果が裏付けられるとすれば、里山の見直しにもはずみがつくだろう▼「森の学校」という映画がある。霊長類学者の河合雅雄さんが自分の子供時代を書いた『少年動物誌』（福音館書店）が原作で、各地で巡回上映されている。昭和10年代の、少年と家族と生き物たちの物語が丹波・篠山の豊かな緑の中で描かれる▼人間の、親と子という縦のつながりがある。人と、時を共にして生きている動物との横のつながりもある。森や林の中では、この二つのつながりが色濃く交差し、また寄り添うようにも見えた▼木から林、森へ。濃く深くなるのは緑だけではない。